

高畑のように生きよう

——スモール・スロウ・バット・ステディ——

高畑誠一の特別企画展で明かされた彼の生き方は、これから生きる子どもたちにも伝えたいものでした。「ちっぽけでも、ゆっくりでもいい。堅実に行こう」は、彼が設立した日商株会社のモットーです。大きな志と熱い情熱で、ゆっくりとしっかりと自分の夢をかなえた高畑誠一——。この町で育った偉人を知ることが、子どもたちの大きな夢につながることを願います。

Takahata Seiichi

Profile

1887年(明治20年)に内子町で生まれる。1893年に町立内子尋常小学校に入学。1900年に特待生で西条中学校に入学。急性肺炎で卒業試験が受けられなかったが、学業優秀のため追加試験なしで卒業し、神戸高等商業学校に進む。1909年に鈴木商店に入社すると、語学力が認められ3年後にロンドン支店に派遣。日本で初めての三国間貿易を行うなど、莫大な利益をあげ、若干28歳でロンドン支店長に抜てきされた。1927年(昭和2年)に鈴木商店が破綻するが、翌年に日商株式会社を立ち上げ、代表取締役役に就任する。1961年には、高畑の寄付により内子中央公民館を建設。内子小学校100周年を記念し、高畑奨学資金を開設、愛媛ゴルフ倶楽部のコースの監修をするなど、内子町に大きく貢献する。1975年に内子町名誉町民となる。1978年(昭和53年)没。

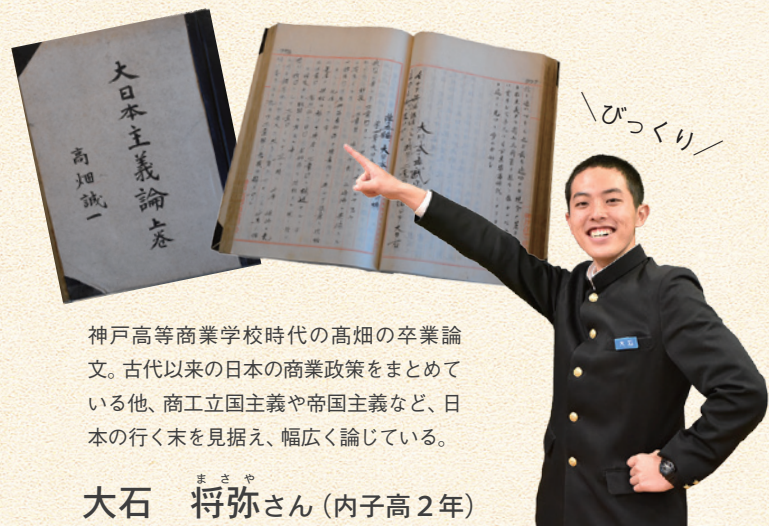
高畑誠一のココがすごい

高畑誠一の功績を顕彰する企画展「高畑誠一の軌跡を辿る―皇帝と呼ばれた男―」と、そのシンポジウムを昨年11月に開催。神戸大学や西条高校、双日株の協力で多くの史料などが展示され、彼の生涯を辿ることができました。「名前は知っているけれど、どんな人？」という人もいると思いますが、企画展に来た人は一様に、彼が成し遂げたことの大きさに驚きます。このページでは総合的な学習の時間で高畑について調べ、シンポジウムで発表した高校生に、その功績の一部を紹介してもらいます。



◀ 内子小学校に建てられた高畑誠一さんの胸像

1,146 ページの卒業論文「大日本主義論」上・下巻



神戸高等商業学校時代の高畑の卒業論文。古代以来の日本の商業政策をまとめている他、商工立国主義や帝国主義など、日本の行く末を見据え、幅広く論じている。

大石 将弥さん（内子高2年）

卒業論文の分厚さに驚きました。上巻で十分なところを下巻まで書いたそうです。すでに商工立国を訴える内容で、後の活躍の原点だと思います。知識だけでなく行動力もあったことが、高畑さんが皇帝と呼ばれるゆえん。僕は内子高校の生徒会長なので、少しでも近づけるように頑張っ、内子高校の皇帝と呼ばれるような学力と行動力を培いたいです。

20代でロンドン支店長、鈴木商店を世界一の商社に



鈴木商店本店の写真

鈴木商店の貿易年商は三井物産を抜いて日本一になったが、昭和2年に破綻。再起をかけた高畑は日商を設立し、10年で大阪に自社ビルを落成するまでに発展した。

中村 琉星さん（内子高2年）

語学力を買われて、20代で鈴木商店のロンドン支店長になった高畑さん。ロンドンでは学生時代以上に勉強して、鈴木商店を世界一の商社に押し上げました。鈴木商社が破綻した後も、日商株式会社を設立し、代表取締役役に就任しました。僕は今年、受験生になるので、高畑さんの常に学ぶ姿勢を見習いたいです。特に英語が苦手なので、頑張ります。



高畑は昭和31年、ボーイング社との代理店契約を締結。39年にボーイング727型機を初めて国内の航空会社に納入した。船舶や鉄道なども扱い、日本の貿易界をけん引した。

陸・海・空を制した男はふるさとを大切にする男

城戸 優輔さん（内子高2年）

高畑さんは配船の無駄をなくす三国間貿易や、日本で初めての鉄道輸出、ボーイング機の代理店契約など、常に時代の先を行き、陸・海・空を制したといわれています。調査では、高畑さんの郷土愛の強さを知り、感動しました。新しい挑戦を続けることや感謝の気持ちを持つことなど、すごい人が大切にしていることを学ぶことができてよかったです。



健康づくりと情報収集のため、ロンドンでゴルフを始めた高畑。日本で初めてのルールブックを作ったことやクラブのヘッドカバーを考案したことなどが有名で、その功績から「日本ゴルフ界の祖」ともいわれている。
【写真】高畑が愛媛ゴルフ倶楽部に寄贈したクラブ（左）と高畑のゴルフ関係の著書

好きなことを突き詰めて日本ゴルフ界にも貢献

辰本 零耶さん（内子高2年）

調査では高畑さんの凝り性な面が見えました。ゴルフもその一つです。休みを使って磨いた技術もすごいですが、愛媛ゴルフ倶楽部のコースを監修するなど、好きなことでも日本や内子町に貢献しています。好きな気持ちにブレーキを掛けないことも大切だと思います。僕も受験勉強をしながら、バスケットボール部の活動を全力で続けたいです。

知られざる高畑誠一の素顔を追って



内子高等学校 教諭

吉田 亮一さん

総合的な学習の時間で13人の生徒が高畑誠一の研究をしました。主題は「知られざる高畑誠一の素顔」。親族からの聞き取り調査を中心に、高畑さんの新たな魅力や事実を掘り起こそうと試みました。強気の交渉で「皇帝を商人にしたような男」といわれた高畑さんですが、親族の話や

手紙から意外な一面も見えました。分家のさつま汁や親族との交流を楽しみにしていたことや姉の墓参りを欠かさないことが、地元への貢献を謙遜していることなど。研究発表で「律儀で誠実な性格が、商売相手の信頼を得るために必要だった」と結論づけた生徒たち。今回の調査で知った高畑さんの人間性を模範にし、学校生活や人生で実践してほしいです。



1_「高畑誠一の研究班」の皆さん 2_内子座で開かれたシンポジウムで成果を発表 3_聞き取り調査をする生徒

人格形成に影響を与えた先輩たちの指導

内子尚武会

明治28年、後の海軍中将となる重岡信治郎が中心となって組織した「内子尚武会」。この頃、県内でも武道を習う尚武会はあったが、内子尚武会は学業・運動など教育全般で、先輩が後輩を指導するという全国でも珍しい自主的な研究組織だった。高畑は松山中学入学の予備教育のために少年部に所属。信治郎の口調をまねて演説の練習をするなど、「人格形成の面では内子尚武会の活動から大きな影響を受けた」と語っている。



「内子尚武会」会員を撮影した写真（前列左から2番目が高畑）



八日市・護国町並保存センター
学芸員 小野 翠さん

高畑誠一が生まれた明治20年代は、内子の製蠟業の最盛期にあたります。町はにぎわい、その様子は「車馬の往来織るがごとし」といわれるほどでした。町を潤した富は教育や娯楽などにつき込まれ、内子の人材と文化が開きました。重岡信治郎や、その叔父で衆議院議員の重岡薫五郎、日本のビール王と呼ばれた高橋龍太郎など、海外で学んだ人材が多く、幼い高畑も自然と海外を意識できる環境だったと思います。

特に内子尚武会（以下、尚武会）の存在が、高畑の後の人生に大きな影響を与えました。尚武会の活動の根底には、信治郎の「後輩に自分のような失敗をさせない」という思いがあります。信治郎は松山中学の受験に一度失敗。誰にも頼らず準備不足だったことから、後輩に助言・指導できる場があればと、尚武会を立ち上げました。会を中心とした交流は長年続き、困ったときに助け合う仲間になっていたようです。高畑に神戸高等商業学校への進学を勧めたのも、神戸に住む内子出身の医者でした。

小さな町ですが、世界を知る先輩たちの大きな物差しで、物事を見たり聞いたりできたのは、大きなこと。信治郎のように、町全体の利益や後輩たちの将来を真剣に考える人々がいたことが、高畑のような人物を育てる素地になったのです。

町の潤いと尚武会が、世界と高畑をつなぐ

Interview Ono Midori

小さな町で育んだ大きな翼

語学力を育んだ高畑誠一の母校

内子尋常小学校

高畑は明治26年、町立内子尋常小学校へ入学した。校舎は明治12年に「化育小学校」として建てられたもので、当時としては珍しいフランス風の洋館だった。この学校に英語の上手な先生がいて、高畑は毎日のように先生宅に英語を習いに通ったという。高畑は後に、「小学校でこの先生にめぐり会い、英語の基礎をたたき込まれたことが、ある意味で私の人生を決定付けたともいえる」¹⁾と記している。（明治末、郵便局時代の写真）

製蠟業で潤った明治期の内子町。その富を教育と娯楽につき込み、人材と文化が開く。自分だけでなく町全体に利益を、今だけでなく次の世代にも繁栄を……。そんな気概を持つ内子町民が、高畑誠一の大きな翼を育んだ。



大正5年の内子座のこけら落とし。娯楽の殿堂は町の潤いの象徴でもあった



内子を発展させた製蠟業。市街地には蠟の晒し場が広がっていた（写真は大洲市）



信治郎の手紙。パリで内子町民3人が会う内容で、世界との距離の近さを感じる

チャンスをラック(幸運)に――

高畑に学ぶ夢のつかみ方

なぜ高畑が皇帝^{カイザー}と呼ばれるまでの人物に育ったのかが語られた、高畑誠一のシンポジウム。登壇者の中から、野邑さんと宮瀬さんに話を聞くと、これから生きる若者や子どもたちへの思いが伝わってきます。

挫折からの躍進

「東京高商専攻部への進学を諦め、鈴木商店への就職を決心」。この事実を知り、私は高畑誠一に興味を持ちました。東京高商専攻部といえば、商業学分野における日本最上級の高等教育機関で、卒業すれば「学士」になれます。当時の学士は日本有数の超トップエリートです。

内子町の両親は、息子の進学を何とか実現させようと応援しました。しかし高畑はその思いに感謝しつつも、実家の苦しい経済事情を冷静に判断し、進学を諦めて鈴木商店への就職を決意しました。高畑にとっては大きな挫折でしたが、気持ちを切り替えて、自分は実社会に出て海外貿易

に従事するのだと決心――。悔しさをバネに自らが選んだ道を懸命に走ります。このことが鈴木商店で世界的な活躍をする転換点の一つになったのです。

切磋琢磨した仲間

高畑は神戸高等商業学校(以下、神戸高商。現神戸大学)に入学した当初から、将来は海外貿易に従事するという明確な目標を持っていました。神戸高商は実学重視で、海外貿易のトップリーダーの養成を掲げた学校。できたばかりの学校は先輩後輩の垣根がなく、伸び伸びと切磋琢磨できる環境で、生徒や先生たちのやる気も高かったようです。学生仲間にも恵まれました。

た。例えば1つ上の先輩には、トヨタ自動車の初代社長になる豊田利三郎、同級生には出光興産を創業する出光佐三や日商社長や貿易庁長官となる親友の永井幸太郎など、優秀で個性豊かな学生たちが囲まれていました。「ガリ勉タイプ」と自称する高畑にとって、知的好奇心が旺盛な仲間たちと一緒に、海外雄飛を目指して世界的な視野を身につけたことが大きな財産となります。

仲間とふるさとを大切に

高畑は神戸高商の卒業論文で、「今後の日本は農業を保護するだけではなく、海外への膨張的發展によって商工立国を目指すべきだ」と論じま



神戸大学大学文書史料室
室長補佐 野邑 理栄子さん

Profile

2002年に神戸大学大学院総合人間科博士後期課程修了、博士。現在は神戸大学関係史料の調査・研究をしている。卒業生である高畑誠一の研究は、その一環。著書に『陸軍幼年学校体制の研究―エリート養成と軍事・教育・政治―』



高畑誠一が通った神戸高商

した。ここで重要なのは、海外進出を論じる前に、日本国内の状況をしっかりと分析していたこと。広い世界に目を向けるだけでなく、まずは「自分の足元のこと」をしっかりと知ることの大切さが分かります。

皆さんは内子町のよさや強みを語ることが出来ますか。ぜひ、高畑誠一のように、皆さんの足元にある魅力をしっかり見つけ直して、そして世界に羽ばたいてください。挫折に負けない強い気持ち、仲間やふるさとを大切に思っている、これが高畑誠一の素晴らしさであり、学ぶべき生き方だと私は思います。



高畑誠一シンポジウムの会場

児童たちに伝えたいこと

内子小学校校長 宮瀬弘吉さん

人生ではいろいろなことが起こり、その中で生きていくことになります。マイナス思考では、いいことはありません。私は、壁にぶつかっても乗り越えて成長した子どもたちを、たくさん見てきました。高畑誠一も順風満帆ではなく、第一希望のかわない人生でした。自身も「チャンスをラックにするためには努力も必要」と語っているとおり、広い視野と判断力、そして努力で幸運をつかみました。プラス思考で常に前を向くことの大切さを、彼は教えてくれます。

内子小学校では5年生の道徳の時間に、高畑誠一のことを学びます。興味のあることを主体的に学ぶことや創意工夫の大切さを伝える内容です。現代は、高畑が生きた時代よりも外国語を学ぶ機会が増え、環境も整っています。学校や地域で、自分と違う人とたくさん出会うこともできます。自分次第で、未来は変えられると信じてほしいです。そして自分も周りも大切にして、高畑誠一のように大きく羽ばたくことを願っています。



◀高畑誠一の胸像の前で
児童と話す宮瀬校長